

# チワンゴンパ *spyi-dban-dgon-pa* の仮面舞踊劇

## マニリンドウについて

佐々木隆子

ネパールのシエルパの仮面舞踊劇マニリンドウについては、特にチヨモランマ(ニウエレスト)南麗のテンボチェゴンパのそれについては何冊か紹介書もあり、よく知られている。ところでシエルパの故郷ソル・クンブー地方には、テンボチェゴンパの外にもマニリンドウの祭りをおこなうゴンパが幾つかあり、ソル地方のチワンゴンパもその一つである。

標高約三千メートルから四千メートルの間にチヨモランマ登山の基地であるナムチェやテンボチェゴンパのあるクンブー地方に対し、ソル地方は標高も約千メートルは低く、農作物も豊かで、人種もシエルパだけでなくタマン、ライ等混住している。このソルのパブルー村にチワンゴンパはある。標高約二千七百メートルの村を見下す高い岩屋根の上のゴンパは、この地方の地主であり、ロザワ・ヴァイローチャナの仮身とされるラマサンデーによって一九一七年、彼の両親への報恩のために建てられた。チヨモランマ北麓にあつて今は中国領

のロンプゴンパのもとにあつたから、寺のイータム(守護神)はロンプゴンパと同じく観音の化身の一つ、デーシエークンドウ *bde-gshegs-kun-hdus* であり、同じくニンマ派である。しかしチベットや、ネパールの工匠達の手になる数々の建物も、全盛時は五十人程いた僧も現在では十人程迄に減つて、荒廃の影がおおつているのはいなめない。この静かな山上の寺が一番活気ずくのがマニリンドウの祭りの日々である。

さて一九七九年のチワゴンパのマニリンドウは十一月三日と七日にかけて(チベット暦では九月の満月の日を中心に五日間)催された。テンボチェゴンパではチベット暦十月の満月の日を中心に三日間であり、チワンでもかつてはチベット暦の十月に催されていたという。チワンでのこの祭りの正式の名を *bde-gsheg-kun-hdus-gar-dban thug-rje-chen-pohi-dkyil-khor* (イータム・デーシエークンドウの踊りと灌頂・観音のマンダラ) と言う。マニリンドウとは元来、マニ *ma-ni* (六字明咒) を

唱えながら長寿薬ツェリン *tee-ri* をつくる儀式 マニリンツ *pa-ma-ni-ri-grub* のなまつたものとされているから、理論上では一年のいつでも、又何度でもありうるが、現在では一年に一度、この長寿薬ツェリンを人々に配り、人々に仏縁を結ばさせる長寿の灌頂ツェワン *tsa-dban* を授け、又その成就を祝つて催される仮面舞踊劇チャムを総称して言う。しかし一般にはチャムをのみさすことも多いし、又僧達はマニリンツを作る日々を言う。マニリンドウの成立は古くない。チワンゴンパのそれは一九三七年に始まつたと伝えられているが、テンボチェゴンパでは一九三〇年とも一九三八年とも云い、ヌタミゴンパでは一九四〇年とも一九五〇年とも云われてはつきりしない。おそらく最初の何年間は実験的・試験的期間であつて、次第に現在の様な形に整えられたのである。どのゴンパもその起源をロンブゴンパとしているが、しかしマニリンドウの仮面舞踊劇チャムは、正確にはチベットのチャムそのままではない。ところで、チベットの仮面劇はハモとチャムの二つに大別される。インド起源のハモは我国の能に似て話の筋と結末、対話、主人公達の性格描写があり、その題材を歴史上の事件や英雄譚に取つている。韻文で書かれたそのテキストは文学のジャンルに属するものと考えられて良い。これに対してチャムは仏教教徒に合うように変えられたチベット土着の仮面舞踊劇で、対話を通して構成される

様な筋もなく、もちろんテキストもない。その起源は、おそらく仏教伝来以前人間に害意を持つ悪魔に人身御供をし、多人喰いも行つた悪魔崇拜の儀式の際の踊りであろうと言ふ。シェルパのマニリンドウはこのチャムから発展した。人身御供はマニリンドウのチャムにも名残が見られる。たとえば後に述べるミナクの踊りや、トグデンの中に犠牲として使われる人形である。チベットのチャムには様々の動物や鳥、悪魔、精霊達があらわれるが、これらは又ボン教起源のものと言われている。チベットの各ゴンパで各々独自のチャムがあり、主として新年(チベット暦)の儀式や、又各宗祖・祖師達の誕生日の祭り等に踊られて来た。この様なチベット各地のチャムがロンブゴンパのチャムに加えて参照されたと思われる。ソル・クンブー地方神や悪鬼達がチャムに登場し、更にこの地方のゴンパのラマ達は、この地方の害をなす悪鬼達からこの地方の人々を守る祈願や、慈雨の祈願を加えた。この様なチャムの上演は、シェルパの人々にとつては数少い娯楽の一つであり、又宗教教育ともなつていたのである。祭りの五日間、デユカン本堂のイータムを祭つた祭壇・デーシェークンドウキンゴルにはトルマ(バターとツアンパで作つた御供物)・チャン(御神酒)・マルメ(灯明)等が供えられ、チョガ *cho-ga* が毎日行われる。十一月三日はパクパチャムと言われる五日の仮面舞踊劇と異つて仮面もなく、衣装も僧

服のまま、只、手に小太鼓・シンニヤン(小さなシンバル)・五色の糸を持つて踊られるチャム・ギユという踊りがある。踊りの踊られる所は、石畳みが敷きつめられたチャムラというデユカンの正面広場で、北にデユカンの入口、他の三方を二階建の回廊が取り囲んでいる中庭である。中心にタルシンというポールが立つ。踊りに使われる楽器は大太鼓・小太鼓(チュガ)・ブチャム(シンバル)・シンニヤン(小シンバル)・カンリン(人間の大腿骨で作った笛)・ギャリン(クラリネットの様な笛)・デユンチャン(三メートル程の銅製の長いホーン)等。踊りに先立つてこれらの楽器や、幟・幡・傘・蓋等を持ったセテンという一行がチャムラに並ぶ。リンポチエがデユカンの入口にある席に着座し、チョガが行われ、タルシンの横に設けられた祭壇のトルマ・チャン等が四方の神々・ユルハ(地方神・スルララギヤン・*zhi-ra-ra-gyan*)等に捧げられるのである。

十一月四日(満月)、ツェワン(長寿の灌頂)の日。着座したリンポチエに白髻、禿頭笑顔の面をつけ、杖をついたミツエリン(長寿の人)が先ずカタをささげ、ついで大施主達、更に一般の人々が供物をカタについで奉納。そしてマニリンツプのチョガの後ツェワンがリンポチエより授けられる。大施主達には五色の布を肩にかけて、又一般の人々には五色の糸で触わりながら、孔雀の羽で灌頂の水をそそぎ、脇僧がツ

エリンを配るのである。

十一月五日。仮面舞踊劇チャム上演の日。チャムの種類は他のゴンパと内容に多少の異同があるが十三種で、一つの踊りはだいたい二十分から三十分である。チャムの上演に際し、まず序として仮面をつけない六人の僧によつてロチャムタシグディン(九拍子の吉祥の踊り)がある。

(一)セルケム 仏にささげる黄金の飲物(チャン・御神酒)の意味で、シャナク(黒帽)というタントリック僧を示す火焰とドクロで飾られたつばの広い黒い帽子をつけ、手に銀のカップとドルジエを持つ六人が、四方の神々とユルハ(スルララギヤン)にツェリルとチャンをささげ、この地方の人々の安寧を祈願する踊り、仮面なし。

(二)ギンバ 四方の守護神、東―持国、南―増長、西―広目、北―毘沙門の四天王の踊り。仮面は青と黄が二人づつ。二人はブチャム、二人はチュガを持つ。

(三)ドルジエドロ パドマサンヴァバの八つの仮身の一つ、太鼓腹のドルジエドロの踊り。

(四)ガチャム 太鼓の踊りの意味で、セルケムに出て来た六人のシャナクが、大・中の太鼓とブチャムを各々二人づつ持ち踊る。パドマサンヴァバの力によつて仏法が伝えられ、その勝利の音を太鼓で象徴したと踊りという。

(五)ミツェリン 十三のチャムには二つのコミカルな踊りがあ

るが、そのうちの二つ。寿老人に相当するミツェリンが杖をつき、片手に珠数を持つて登場する。このミツェリンは又中国禪をひろめ、カマラシーラとの論争に破れたハシヤンを投影しており、誤つた仏道の伝道者を表わすという。二人の弟子に仏を祀る方法や、礼拝の仕方を教えるが、二人は失敗ばかりしているその三人のパントマイムのやりとりが人々を笑わせる。

(内) ラマテンタン (ラマ招待) ・ (ト) ルラン この二つと前の一つは構成上結びついていて、ラマテンタンはすなわちラマを招いて正しい教えの弘法を象徴する。開始の儀式の後退席していたリンポチエが再着座し、鈴とヴァジラを執つてチヨガを行い、護摩をたく。一方で骸骨の面をつけたルラン (デュルタク・すなわち墓場の主であるチチパテイのことで、地獄の王ヤマの助手) が二人、次いでタントリック僧シヤナク二人が加わつて踊る。リンポチエは更に鈴と、ヤクの毛で作つた払手を振つて悪魔を払う。最後にルランがカンバという人形をしめ殺し、ヤマへ犠牲としてささげて終る。

(外) ゴンチェン ゴンポ (守護神) 四人の踊り。持ち物から、ヤマンタカ (カバールと剣) ・ ハモ (槌) ・ ツァンパカルポ 白ブラフマ (鏡と杯) ・ タムディン (人形) と思われる。

(九) ミナクカド ミナクとは黒い人の意味で、ネールンともいふ地方の人々を驚ろかす悪魔を退治する役目を持つ下級神。

インド神話では悪鬼であるカド (ダキニー) が、チベットでは慈悲と寂靜の化身で空中を飛翔する天女であるとされる。仮面はなくミナクウケンという冠をつけた五人の踊り。尚、他のゴンパでは(六)がなく、この(九)がミナクとカドの二演目に分れて十三となつてゐる。

(十) トクデン 二番目のコミカルなパントマイム。トクデンはインドのサドゥ (行者) で、一時間近く、二人の弟子ツォルジェとクマガキチャクパとで場内の人々をわかせる。

(出) ハマニ 余分の二という意味であるが由来等よくわからない。ミナク二人の踊り。

(出) ティチャム 劍の舞、ゴンチェン四人が劍と棒を持つて踊る。

(出) ゴルチャム シヤナク二人とルラン二人の終りの踊り、最後にトルマを投げ上げて四方の神々とユルハに供養する。

(付) ロチャム (呼び戻しの踊り) 最後の踊りの四人と更に二人のシヤナクが登場し、ひと踊りして全部終了。十一月六日・チンセーチューチヨガ (護摩供養)、十一月七日・デーシェークンドウ・チヨガと行なわれ、五日間の全行事は終了した。

(龍谷大学大学院修了)